



Title	「怒り」を表す感情概念に関するフレーム意味論的考察：コーパス調査に基づくアメリカ英語のangryとベトナム語のgiậnを比較して
Author(s)	Doan, Ngoc Minh Tran
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2024, 2023, p. 85-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97345
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「怒り」を表す感情概念に関するフレーム意味論的考察 —コーパス調査に基づくアメリカ英語の *angry* とベトナム語の *giận* を比較して—

Doan Ngoc Minh Tran

1. はじめに

本稿の目的は、フレーム意味論(Fillmore 1982)を援用し、Doan(2023)の主張がベトナム語とアメリカ英語の実例においても成り立つかどうか、両言語のコーパスを用いて検証することにある。具体的には、アメリカ英語の ANGER¹とベトナム語の GIÂN に関して、感情の対象となる相手が典型的にはどのような存在か、また、これらの概念を意味に持つアメリカ英語の *angry* (形容詞) および、それに対応するベトナム語の *giận* (動詞) が使われる文脈はどのようなものか、この 2 点について分析を行う。

この研究の背景には、先行研究の分析が感情の生理学的側面に見られる普遍性を重視し、個別的な文化の側面にはそれほど関心が寄せられない傾向にあったという点が指摘できる。例えば、感情概念の研究において中心的な先行研究と言える Lakoff and Kövecses (1987) は、アメリカ英語の ANGER を表す表現を分析する中で、感情の概念化には身体的経験に基づくメタファーなどが基盤にあることと、感情表現の理解ではメタファーが不可欠な役割を果たしていることを指摘している。その上で、英語話者の ANGER に関する理解や行動に共通するモデルとして、表 1 の 5 つの段階からなるモデルを提案している (p. 211)。

1. Offending Event → 2. Anger → 3. Attempt at control → 4. Loss of control → 5. Act of Retribution
表 1 : ANGER の典型的な理解モデル (Lakoff and Kövescs 1987:211)

確かに Kövecses らの研究は、感情の普遍的側面に注目することで大きな成果を挙げていると言える。しかし、感情に関する従来の議論の大半は、あくまでその普遍性に焦点が置かれており、それを超えた言語の機能と感情の関わりが論じられる際にも、英語の言語文化の影響があるようと思われる (第 3 節で詳しく論じる)。したがって、Kövecses らの研究では、ベトナム語など他の言語文化における感情を正確に捉えられるかどうか、議論の余地があると考えられる。

上記の問題意識の下、Doan(2023) では、相互補完的な 2 つの心理的テストを用い、アメリカアメリカ英語の ANGER とベトナム語の GIÂN という感情語がそれぞれの母語話者のどのような背景知識 (フレーム) を活性化させるのかを調査した。そして Kövecses らの理解モデルが通言語的・通文化的にベトナム語においても妥当なものであるかどうかを、認知言語学の観点から検討した。その結果、感情語に関しても、言語ごとに固有のフレームに依存した解釈がなされ、ANGER と GIÂN は「ある出来事に対する不快感」という点では共通するものの、不快感の判断基準は言語ごとに異なる傾向にあることが明らかになった。具体的には、ANGER は、個人の権利と利益が侵害される点に着目した解釈を中心とし、相手との関係に関わらず、自分の状態や相手からの攻撃的な態度に焦点を当てる傾向が観察された。一方、ベトナム語の GIÂN は、親密な相手が行う行為としての妥当性に注目した解釈を中心とし、相手と自分の親密な関係にまず焦点が当てられる特徴が見られた。

2. フレーム意味論 (Fillmore 1982)

本節では、Fillmore(1982)を基に、本稿の理論的枠組みであるフレーム意味論を簡潔に説明する。フレーム意味論は、Fillmore(1982)によって提案された理論で、ある言語表現の意味を正しく理解するためにはフレーム的知識が必要不可欠なものであると考える点に特徴がある。ここで、フレームとは、言語表現によって喚起される「背景的知識」であり、フレーム意味論における語の意味とは、どのフレームのどの部分を際立たせるかを示すものであるとされる(Fillmore 1982)。

例えば、英語の *buy* という語を理解するには、まず「買う人(BUYER)が代金(MONEY)を売り

¹ 本稿では、言語表現の意味・概念を指す場合に大文字を用い、言語表現を指す場合には小文字のイタリックを用いて議論を進める。

手 (SELLER)に渡すことと引き換えに、商品(GOODS)を受け取る」という「商取引」の背景的知識(フレーム)にアクセスする必要がある(Fillmore 1982:378)。また、商取引の場面における具体的な行為を表す語 (*buy, sell, pay* など) は、商取引のフレームを喚起し、それぞれがある特定の側面を際立たせたり背景化したりする。例えば、(1)(2)が示すように、動詞 *buy* は、売り手(SELLER)と代金(MONEY)を背景化し、買い手(BUYER)と商品(GOODS)を際立たせる。反対に、動詞 *sell* では、売り手(SELLER)と商品(GOODS)が際立っていると考えられる(Fillmore 1982:378)。

- (1) **Mary bought the car.** (作例) (<BUYER>と <GOODS>が際立つ)
- (2) **John sold the car.** (作例) (<SELLER>と<GOODS>が際立つ)

フレームという道具立てを用いて、異なる言語で一見して同じような単語の意味を比較するともできる。例えば、日本語と英語で際立つ部分は同様であるもののフレームが異なる例として、Fillmore (1982)による「ぬるい」と *lukewarm* の比較を見てみよう。Fillmoreによれば、*lukewarm*と「ぬるい」はいずれも液体の温度を表現する際に使用され、液体が室温程度であることを意味する。しかし、(3)と(4)の対比から分かるように、日本語の「ぬるい」は、液体の熱さが不十分である場合にのみ使用され、冷たさが不十分である場合には用いられにくい。一方、英語の *lukewarm*は、液体の熱さ・冷たさのいずれが不十分である場合にも使用でき、(5)と(6)はどちらも容認される (Fillmore 1982:383)。つまり、英語の *lukewarm* のフレームは、日本語の「ぬるい」のフレームより広いと考えられるわけである(容認性判断も Fillmore による)。

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> (3) このお茶はぬるい。 (4) (??)このビールはぬるい。 | <ul style="list-style-type: none"> (5) This tea is lukewarm. (6) This beer is lukewarm. (Fillmore 1982:383) |
|---|---|

このように、異なる言語における語の意味を比較する際、その語が指示する部分だけでなく、その背景となるフレームを探ることも必要であると言える。

以上、本節では、Fillmore (1982)が提案したフレーム意味論を簡潔に説明した。次節では、アメリカ英語の ANGER とベトナム語の GIÂN に関する先行研究を概観し、それらの研究が抱える問題点を指摘した上で、本稿の具体的な課題を示す。

3. 先行研究

3.1. ANGER に対する身体的経験基盤アプローチ (Lakoff and Kövecses 1987)

本節では、ANGER に関する先行研究を概観し、それらの研究が抱える問題点を指摘する。身体的経験が言語の重要な基盤を成すと考える認知言語学の分野では、「感情」の概念化が、言語表現の分析を通して様々な観点から論考されてきた。初期の研究として、Lakoff and Kövecses (1987)は、認知言語学の観点から、アメリカ英語の感情語の 1 つである ANGER の比喩表現を分析した。彼らは「ANGER は容器内の液体」といった身体的経験に基づいたメタファーを抽出し、感情の理解に関して、メタファーは重要な役割を果たしていると述べる。

なお、Kövecses らは、感情に関する慣用表現はばらばらに存在するのではなく、メタファーなどを基盤にした一貫性を持ち、また、感情を引き起こす典型的な状況やそれによって起こる身体の生理的変化は表 1 のような典型的理解モデルの形で構造化されると主張している。

1. Offending Event (*Don't be a pest*)
 2. Anger (***His anger welled up inside him***)
 3. Attempt at control (*I suppressed my anger*)
 4. Loss of control (*He just exploded*)
 5. Act of Retribution (*He started snarling*)

表 1 : ANGER の典型的な理解モデル(Lakoff and Kövecses 1987 : 211)

感情の概念化を説明する際、Kövecses らによる「身体の生理的経験基盤」に基づくアプローチは確かに有用であるものの、メタファーのみに頼った分析では、ある言語の母語話者が「感情」をどのように理解しているかを十分に説明できないという問題も残されていると言える。つまり、表 1 の感情モデルでは、感情を経験する個人の内面に主な焦点を当てることで感情の連鎖プロセ

スが捉えられているが、感情の外部要因として機能する文脈や文化的背景はそれほど注目されず、その点において感情の多面性が簡素化されすぎているように思われる（ただし、Kövecses 2020 も参照）。

この点に関して、文化心理学の観点から行われた研究 (Markus and Kitayama 1991, Mesquita 2001, De Leersnyder et al. 2015) を参照しておきたい。これらの研究によれば、感情は内から出るだけではなく、文化によって、個人の思考、価値観、社会的文脈との相互作用を反映するものであるとされる。具体的な文化の違いとしては、西洋文化と東洋文化の感情表現が個人主義と集団主義という文化価値観と深く関連していることが挙げられる。この点について、少し詳しく説明しよう。

Markus and Kitayama (1991)によれば、文化が異なる場合、自己、他者、および両者の相互依存の解釈は著しく異なるという。そして、そのような解釈の違いによって、社会状況の解釈も制約を受けるため、社会状況の認識も異なるとされる。例えば、集団主義が中心的な東洋文化では「個人同士の基本的な関連性を主張するという個性」が明確であり、「他者への配慮や調和のとれた相互依存」が強調される。このような自己観を「相互協調的自己観 (interdependent construal of the self)」と呼ぶ。一方、個人主義が中心的な西洋文化では、個人は「自己に注意を払い、独自の内的属性を発見して表現する」ことにより、他者からの独立を維持しようとする。このような自己観を「独立的自己観 (independent construal of the self)」と呼ぶ (pp.226–227)。

他に、Mesquita(2001)と De Leersnyder et al. (2015)では、同じ文化の人であれば、人間関係のゴールを共有すると、同じ感情を経験する傾向があると述べられている。つまり、感情の経験よりも、文化の基準に基づく状況の評価が先立つということである。また、状況評価の違いの根底には、文化間の価値判断の違いがある可能性も指摘されている（表 2）。例えば、個人主義文化の社会では、個人の自律性を維持しながら、お互いの独立をサポートする。したがって、個人の自尊心や自律性の反映と言える ANGER のような感情は、高く評価される。対照的に、日本のような集団主義文化における社会では、相互に依存し、互いの期待に適応することをゴールとする。その場合、自分の行動を調整する必要があるため、自分の欠点を反省することが重要な価値を持つ。したがって、他者との調和を促進する「恥」のような感情が引き起こされやすくなる。

個人主義の文化における感情	集団主義の文化における感情
<ul style="list-style-type: none"> 個人の基準および目標に基づく 個人の主観的な感情に焦点を当てる 相対的な社会的地位への影響はあまり重視されていない 	<ul style="list-style-type: none"> 社会的価値の評価に基づく 大部分は、個人の内面ではなく、現実を反映している 自己の主観性に限定されるのではなく、自己と他者の関係に属している

表 2：個人主義の文化と集団主義の文化における感情の特徴 (Mesquita 2001 に基づく)

つまり、西洋文化では、個人の基準や目標が優先され、個人の内面が注目の中心となる傾向がある一方で、東洋文化では、社会的価値が先行し、自己と他者の関係が重視される傾向が見られるのである。

したがって、感情の連鎖プロセスだけに焦点を絞って感情の理解モデルを立てた場合、各言語文化が有する感情理解の一面しか捉えられていない可能性がある。感情は、個人の内面とともに文化的背景や社会的文脈の相互作用によって形成され、表現される。そのため、感情モデルを的確に理解するためには、個人の感情だけでなく、それを裏付ける背景知識、文化、社会的要因を考慮することが不可欠であると本稿は考える。

3.2. アメリカ英語の ANGER とベトナム語の GIẬN に関する心理的な実験 (Doan 2023)

Doan (2023)は、抽象的な感情の捉え方には文化もさまざまな形で影響を与えるという立場から、Kövecses らが提案したアメリカ英語の基本感情もその言語文化を反映していると指摘した。そのため、ある言語文化が感情をどのように捉えているかを知るために、生理学的基盤や身体的反応だけでなく、母語話者がその感情に対して有する背景的知識を知る必要があると主張した。

Doan は、相互補完的な 2 つの心理的なテストを用い、アメリカ英語の形容詞 *angry* とベトナム語の動詞 *giận* という感情語において、それぞれの表現が母語話者のどのようなフレームを活性化させるかを調査および分析した。第 1 の実験では、アメリカ人 2 名、ベトナム人 3 名を対象に母語で自分の感情経験について記述してもらい、その結果、表 3 に示したような「感情」の焦点化

の要素は言語ごとにずれがあることが明らかにされた。

アメリカ英語の <i>angry</i>	ベトナム語の <i>giận</i>
・「個人の権利と利益が侵害された」という個人基準に基づく ・主観的感情を強調する傾向がある	・「親密な相手としてすべきではないことをされた」という社会基準に基づく ・自分と相手の関係に焦点を置く

表 3：両言語の感情における 3 つの相違点 (Doan 2023:98)

第 2 の実験では、感情語が実際に母語話者に表 2 の要素を喚起するかどうかを検証するため、両言語の母語話者 8 名ずつを対象に、被験者に作文課題を行ってもらった。作文の形式は、以下の通りである。

・例文の形式：

英語 : I was **angry** that (CAUSE), so I (REACTION).

ベトナム語 : Tôi (cảm thấy) *giận* vì..., nêñ tôi...
私 感じる *giận* ので そして 私
(...ので、私は *giận* だと感じて、....しました。)

その結果、アメリカ人被験者のうち 6 名が (7) のように個人の権利と利益が侵害される内容（例：あおり運転など）を回答し、かつ、怒りの原因となる相手を特定せず、被害を受けた個人の状態に焦点を当てる傾向が観察された。また (7) の解釈にも含意されるように「復讐」の意味を含む例が観察されたのもアメリカ人被験者の特徴である (Doan 2023:99)。

(7) I was angry that *someone cut me off in traffic*, so I *flipped them off*. (Doan 2023:99)

一方、ベトナム人被験者は、8 人中 8 人が (8) に示したように、感情の起因となる他者との「親密な関係」を具現化させて回答した。特に「親密な人がすべきではないこと」に関するものに加えて、感情の原因となる相手との関係を明示する傾向が観察された。それゆえ、反応としては「復讐」ではなく「内向的な態度」が多く見られる (Doan 2023:99-100)。

(8) Tôi *giận* vì *người đó* đã không làm được nhữñg gì họ hứa,
私 *giận* から あの人（彼氏）しなかった 得る 複数 何 彼 約束する
nêñ tôi đã bỏ về măc cho họ xin lỗi rất nhiều.
だから 私 帰った にもかかわらず 彼 謝る たくさん
(あの人があの人が約束を果たさなかつたことに私は *giận* して、彼が謝ったにもかかわらず私は帰った。)
(Doan 2023:100)

しかし、Doan (2023)の議論にはデータの少なさに起因する問題点も残されていると言える。Doan (2023)では、Lakoff and Kövecses (1987)の普遍的な感情表現モデルを発展させるには、言語ごとのフレームによる理解も併せて必要であるという議論を行った。しかし、上で見た 2 つの実験は、小規模な実験であるため、被験者の主觀に左右される可能性があり、全体の傾向を捉えにくい。特に第 2 の実験において、文脈から切り離された少数の作文例だけでは、対象者の感情語の背景知識を正確に分析することが難しいと言える。そのため、感情語のデータの量を増やし、Doan (2023)が提案した仮説の妥当性を検証し、アメリカ英語とベトナム語の感情語が文脈の中で実際にどのように使われるかをより深く観察する必要がある。この問題点を踏まえて、次節では本稿の研究方法を説明する。

4. 研究方法

本節では、アメリカ英語の ANGER とベトナム語の GIẬN のフレームを比較するためのコーパス調査の方法を説明する。すでに述べたように、Doan(2023)では、ANGER と GIẬN はフレームが異なることを主張した。Doan の主張は、ANGER は、個人の権利と利益が侵害される観点からの解釈を中心とし、相手との関係に関わらず、自分の状態と攻撃的な態度に焦点が当てられる傾向

にあり、一方、ベトナム語の *GIẬN* は、相手と自分の親密な関係にまず焦点が当てられる特徴があるということであった。本稿では、この主張について検討するために、コーパスから用例を検索し、*angry* と *giận* の感情がどのような対象に向かっているか、これらの語がどのような状況で使用されているか、前後にどのような感情語が共起しているかを分析し、それぞれの特徴を整理する。

分析対象は、*angry* と *giận* が用いられている用例において、感情の向かう対象となっている相手、および、前後の文脈で感情語に近接して生じている語句である。また、分析結果を示す前に、「感情の対象」と「共起する表現」について簡単に説明する。ここでの感情の対象とは、「恋愛関係」「夫婦関係」「家族関係」「親友関係」から成る「親密な関係」と、それ以外が含まれる「親密でない関係」とに大きく区別する。また、ここでの共起する表現とは、*angry* や *giận* の近くに生じ、かつ、複数の作品で出現する語句を対象とする。また、共起する表現は必ずしも *angry* や *giận* と隣接しているものに限らず、文脈の情報や主体の感情を明確にするのに役立つのであれば、共起する表現として扱う。さらに、共起する表現には、感情語の類義語（例えば *angry* と一緒に出現する *unfair* や *unscrupulous* など「不公平」に関する語）も含めて分析する。

用例を採集したコーパスの情報は表 4 に示した。なお、本稿では、アメリカ英語とベトナム語の 20 世紀以降のデータを比較する。また、ジャンルに関しては、前後の文脈から母語話者の意図や、より深い描写状況を読み取るために、文学作品に限定することとした。

コーパス名	時代	ジャンル	総合数
COCA (Corpus of Contemporary American English)	1990 年～2019 年	口頭、小説、一般向け雑誌、新聞、学術論文誌	約 10 億 (2023 年現在)
VIETLEX (Vietnamese Corpus of Vietlex)	— ²	小説、一般向け雑誌、新聞、学術論文誌	1 億 5000 万語 (2023 年現在)

表 4：本研究で使用したコーパス

具体的な検索方法は次の通りである。まず、*angry* における感情の対象を調査する際は、*angry at*, *angry with*, *angry about* に続いて現れる名詞句を検索し、それぞれランダムに 50 件ずつ（合計 150 件）を抽出する。*giận* の場合は、総数 445 件のうち、*giận* の主語の感情が観察できる 163 件を抽出する。両言語の用例数を表 5 に示す。

<i>angry</i>	<i>angry at</i> : 50 件	<i>angry about</i> : 50 件	<i>angry with</i> : 50 件
<i>giận</i>		163 件	

表 5：COCA と VIETLEX における *angry* と *giận* の用例数

5 節では、それぞれの感情語について、コーパスから得られた用例を観察し、どのような使用特徴が見られるかを検討する。

5. *angry* と *giận* の比較

本節では、まず 5.1 節と 5.2 節で、コーパスの用例から *angry* と *giận* を含む例を抽出し、感情の対象を表す語と、文脈内で共起する表現を分析する。続いて、5.3 節で両言語の相違点を比較する。

5.1. *angry* の分析

まずは、COCA コーパスの用例³を用いて、*angry* の分析を行う。

² VIETLEX では用例の時代範囲が公表されていない。

³ 以下、用例における強調は、すべて本稿筆者によるものである。

5.1.1. *angry* における感情の対象

	関係の種類	頻度 (合計 150 件)
親密な関係 (70)	恋愛関係 (片思い関係も含まれる)、夫婦関係	31 件
	家族	34 件
	親友	5 件
親密でない関係 (80)	あまり親しくない人あるいは「敵」と見なす知り合い	46 件
	事態・被害を受けた状態	34 件

表 6 : *angry* における感情の対象とその頻度

表 6 からわかるように、*angry* の対象には一定した傾向が見られない（「親密関係」が 69 件；「親密でない関係」が 46 件）。例えば、(9)における母親（親密な人）や 0 における初対面者（親密でない人）など、話者との関係に関わらず、*angry* の対象になりうることがわかる。また、(9)0 の文脈では、*angry* の主体が、その対象に対して愛情を持っているとは考えられない。ほかに、コープスの用例から、34 件の *angry* の対象が、原因の相手を特定せずに、自分の気分を害した事態に焦点が当たられるか、あるいは、被害を受けた状態に注目される傾向がある。さらに、*angry* の場合、人以外にも、例えば (11) の「料理をしなければならない状態」（自分の好ましくない状態）までもが対象になり得る。

(9) “My father had drifted in and out of my life, mostly out of it. The only real thing I remember about him was his absence.

“Mom, he'll be here,” I said with the trust of an 8-year-old.

We were supposed to meet him for a picnic, I got **angry at her** when he didn't show up; she was the only one there to take the blame.”

(*Eulogy for a Warrior*, Micki Lindeman 2007)

(10) ““Boy, **what is your name ?”** Mrs. Brown hissed as she pulled me aside.

“Camden Paulsen.”

“Camden, why do you feel like you need to interrupt a perfectly traditional pie contest ?”

“That's the problem, Mrs. Brown. Times are changing. In case you haven't checked, women have the vote now...,” I told her, starting to feel **angry at her old-fashioned ideas.**”

(*Equal Slices of Pie*, Dejarlais Rebecca 1997)

(11) “The dollhouse mother wields her knife, while the children stay far away, in the upstairs nursery. She's **angry about making dinner again.** She **hates to cook**, the bland routine of it, the eternal return of it, the never-ending present of chopping, boiling, cleaning up.”

(*My Dollhouse, Myself: Miniature Histories*, Cooley Nicole 2015)

5.1.2. *angry* と共起する表現

次に、*angry* の共起する表現は、表 7 の通りであった。なお、表中の括弧内の数字は、複数回生起した場合の生起回数を表す。

「個人利益の侵害」 に関する語句	<ul style="list-style-type: none"> 不公平な取り扱い 形容詞 : <i>fairly, unfair, unscrupulous</i> 自尊心の侵害 名詞 : <i>betrayal, insult</i> (3) 動詞 : <i>lie, trap, mistreat, respect, disrespecting, to be left(alone)</i> (3) フレーズ : <i>be stabbed in the back, be ignored, to be used, one's position being eliminated, be done something sneaky</i>
---------------------	--

「後続反応」に関する語句	<ul style="list-style-type: none"> ・攻撃的あるいは暴力的な態度 名詞 : <i>argument, terrible rage, debate, resentment</i> 動詞 : <i>stare into, shout, yell, crumpled a bulletin in one's fist, eyes prick, throat lump, tense, tremble, blame, hit, strike, kill, summon fire, stir up the flame</i> 形容詞 : <i>resentful, furious, boldly, murderously, loudly</i> ・対象に対する嫌悪感 動詞 : <i>disgust, hate (3), frustrate</i> 形容詞 : <i>this poor disgusting bum, gross</i> ・復讐意欲 <i>One day I scolded her for what she did, and she...bewitched me, turning me into a horse.</i> <i>"I'll teach everyone a lesson. I'll run away from home and leave my room messed up just like this."</i>
--------------	---

表 7 : *angry* の共起する表現

Doan (2023)では、ANGER は主に「個人の権利と利益が侵害される感情」を表すとしていたが、実際に、コーパスの用例の 76 例では、*fair, insult, betrayal, trap, be ignored, disrepecting* などが *angry* に近接して観察された。つまり、ANGER は「利用されたり、個人の利益が侵害されたり、侮辱されたりしたとき」の感情を表すことが多いことがわかる（たとえば (12)(13)(14) を見られたい）。

- (12) “Some people at work **have been doing something really sneaky and bad to me** and so I'm **angry at them.**”
(*Lost Boys*, Orson Scott Card 1992)
- (13) “Jim started forward, moving like a man breasting a strong chill current, trying to **shout**, and **angry at the way everybody ignored him.**”
(*The Recreation Room*, Cowdrey Albert E 2007)
- (14) “He was very **angry with** her, **for using him**; presently with himself, **for being usable.**”
(*Omni*, Le Guin, Ursula K. 1995)

続いて、*angry* の共起する表現のうち、感情の後続反応と考えられるものを分析する。第 3 節で確認したように、Lakoff and Kövecses (1987)によれば、ANGER モデルの後続反応には、攻撃的な復讐意欲が含意されるとされた。実際に、後続反応が確認できる 35 件の用例のうち、29 件では、*murderously, shout, yell, hit* など、攻撃的態度か復讐欲求の含意が見られた。たとえば (15) では、*angry* の主体は、後続反応として暴力的な態度 (*hit, strike, argument*) を取ったり、(16) では、感情の対象に対して復讐行為 (*turn into a horse, lock up*) が行われたりしている。さらに、主体が対象に対して怒りの感情を覚えると同時に、嫌悪感も感じることも観察される (*the worst mother in the world, hate*)。

- (15) “There had been an **argument** about money and about who did the most work. He **get angry with** me all the time... -- and last night --... **he do something very bad to me**...but he **hit** me. And then... **hit** me again in our bedroom... Lauren sounded calm as she asked where he had **struck** her. On my back. Only on back.”
(*Four Poems And Two Stories*, Mary Donnell 2019)
- (16) “Then after that I learned even more of the arts of magic, and I came to her and stayed with her. One day I scolded her for what she did, and she **became angry with** me and **bewitched me, turning me into a horse.** She **locked me up**, as you saw, in that treasure chamber,...”
(*The Story of the Forty Maidens: Introduction and Translation*, Fudge Bruce 2013)
- (17) “She'd already heard how she was ruining her kids' lives by packing them up and returning to the old homestead where she'd been born and raised. To **hear them tell it, she was the worst mother in the world.** The word “**hate**” **had been thrown around, aimed at her**.... So **her kids were still angry with her.** Too bad.”
(*Close To Home*, Jackson, Lisa 2014)

本節で見てきたように、アメリカ英語の ANGER は「個人の観点から、相手との関係に関わらず、個人の自尊心や個人的な利益が侵害された不快感」を表すと言える。また、ANGER には、攻撃的な態度と復讐意欲の含意が含まれる。これは、Lakoff and Kövecses (1987) の主張に一致し、かつ、3.2 節で述べた Doan (2023) の実験結果とも合致すると言ってよいであろう。

5.2. *giận* の分析

続いて、VIETLEX コーパスの用例を観察し、*giận* の対象とその共起する表現を分析する。まずはコーパスの用例から *giận* の対象として現れる関係の種類と頻度を表 8 に示す。

	関係の種類	頻度 (合計 163 件)
親密な関係 (124)	恋愛関係 (片思い関係も含まれる)、夫婦関係	72 件
	家族	28 件
	友達	24 件
親密でない関係 (39)	あまり親しくない人あるいは「敵」と見なす知り合い	39 件

表 8 : *giận* の対象とその頻度

5.2.1. *giận* の対象

表 8 が示すように、*giận* における感情の対象は、主に「親密な人」であると言える。特に、恋愛関係と夫婦関係が合わせて 4 割を占めている (72/163 件)。具体例としては例(18)が挙げられる。

- (18) “Mình có *giận* tôi hay không ?
 あなた ある *giận* 私 または ない
 (私のことを *giận* する?)
 Vân Hạc mỉm cười :
 (人名) 微笑む
 (ヴァンハットは微笑んで答えた。)
 - *Giận* lám chử. Làm khổ người ta như thế, ai mà không *giận* ?”
giận とても だよ 苦しくする 私 あんなに だれ だって ない *giận*
 (とても *giận* するよ。私をあんなに苦しめたんだ、誰だって *giận* するさ。)
 Cô cũng đáp lại bằng nụ cười bông đùa:... tôi không bắt mình thi cử nữa, xin mình vượt giận làm lành.”
 (彼女も微笑みながら「...あなたに受験などさせないわ。許してね。」と返事した。)
 (Lèu Chông, Ngô Tất Tố 1939)

(18) は、危険な場所で過ごしている夫 (ヴァンハット) に対して、健康状態が悪化しているのではないかと妻が気遣う文脈である。夫の危険な場所での経験を聞いた妻は、自分が夫をその状態に晒してしまったことを後悔する。その際、妻は (18) のように夫に問い合わせ、自分のことを *giận* するかどうかを質問しているわけである。ここでは、結婚相手に対する親しい呼びかけ語である *mình* (あなた) を使っていることや、相手に対して「微笑みながら」答えていることからも分かるように、(18) は明らかに夫婦同士の親密な会話である。したがって、夫の発言に使われている *giận* には、相手を非難したり責めたりするような攻撃的な感情は含まれていないと考えるのが自然である。むしろ、夫は、妻に自分の悲しみを伝え、拗ねるような態度で相手に共感を求めていいると言えよう。つまり、(18) の第 3 文「とても *giận* するよ」は、悲しみから立ち直り、元気を取り戻すために、夫が妻からの気遣いを求めて拗ねている場面であると言うことができる。

5.2.2. *giận* の共起する表現

次に、*giận* の共起する表現を見ていく。3.1 節でも述べたように、*giận* で表される感情は、必ずしも復讐意欲を伴うとは限らず、むしろ「悲しさ」のような受動的な感情を伴う傾向がある。実際に、今回のコーパス調査でも、主体の感情に関して、*giận* は受動的な感情である *buồn* (悲しみ) と共に起するか、あるいは、*giận* 自体が *buồn* で代用されていると言える例が多く見られた。また、*giận* は親密な人への感情であるので、親密な関係に関わる語句と共に起することが多く見られる。たとえば、*thương* (相手を見守りたいという感情)、*giận nhau* (恋人同士が喧嘩した後の冷戦状態)、*ghen* (恋愛による嫉妬感)、*làm lành* (仲直りする) などである。

(19) が示すように、*giận* は恋愛関係における要素の一種であり、恋人同士（つまり、内輪の人）が感じる感情の一部として存在する。

(19) “Nếu bạn văn sĩ bây giờ chịu viết những **chuyện tình**, rồi cho họ lấy nhau đi, rồi cho họ **ghen** nhau, **giận nhau** đi, thì mới chứng thực rằng **ái tình** chỉ làm cho con người ta khổ sở !”
(もし今の作家たちが恋愛の物語を書き、主人公たちを結婚させ、そして彼らに嫉妬させ、互いに *giận nhau* させるなら、それこそ恋愛が人々を苦しめることを証明するのだ！)

(Giồng Tó, Vũ Trọng Phụng 1936)

続いて、*giận* の共起表現のうち、後続反応と言えるものを確認する。後続反応が確認できる 87 件の用例のうち、復讐的な態度や攻撃的な態度のものはわずか 15 件であった。これに対して、内向的な態度（例えば、無口になる、相手と距離を取る、一人で考え込む、受け入れる）が表される例は 39 例も観察された。残りの 33 例は、相手に自分の気持ちを察してほしいと拗ねたり、相手を可愛がったり、あるいは、相手を厳しく注意したりするような態度である。たとえば、(20)見てみよう。

(20) “Cái thằng ngu thật, ai lại đi tắm thuốc trừ sâu. Chắc nó tưởng đó là chai dầu gội”, chị Heo cắn nhẫn, nhìn nó **vừa giận vừa thương**.

「殺虫剤の風呂に入るなんて馬鹿よ。あいつ、シャンプーだと思ったのね」とヘオは文句を言い、弟を見ると、*giận* と共に「弟を見守りたい」という感情が湧いた。その後、ヘオは、ウットコーにお粥を食べさせ、ウットコーを抱きながら、眠った。
(Một Đứa Trẻ Vừa Chạy Trốn Khỏi Tôi, Nguyễn Nga 2020)

(20)の文脈は、姉のヘオと弟の会話に焦点が当てられている。弟がシャンプーと殺虫剤を間違えて使用し、その結果、病院に運ばれる事態となってしまった。姉のヘオは、弟が殺虫剤を飲みこそしなかったことに安心しつつも、弟がシャンプーと間違えたことに対して *giận* の感情を表している。この *giận* には、当然、「復讐してやりたい」という攻撃的な感情は含まれていない。むしろ、「相手を見守りたい」や「今後どうすればいいか困っている」というような悲しみと心配が表されていると考えるのが、文脈上自然であろう。ここでの「弟」のように、親密な人が自身を大事にしないとき、我々は心配したり、時には相手を叱ったりすることがある。しかし、叱ることは、復讐することではない。(20)が示すように「弟にお粥を食べさせ、抱いてあげる」という姉の後続反応は、攻撃的態度ではなく、むしろ愛情のある態度であると言える。

また、会話の用例 37 件のうち 26 件で、親密な呼びかけ語が用いられていることにも注目したい。重要なことは、ベトナム語の呼びかけ語は、年齢や相手との関係によって変化するということである。そのため、会話の呼びかけ語から、話し手と聞き手の親密度が確認できる。例えば夫婦関係 1 つを例にしても、夫婦の時々の感情の度合いなどによって、様々な呼びかけ語が使われる。 (21) では、車に気を付けるよう妻に何回も注意したのに、結局、妻が交通事故に遭ったと聞いた夫が、心配しながら、妻のことを *giận* している。ここで着目されたいのは、夫は妻に対して *giận* しながら、お互いに親密な呼びかけ語 (*mình* (あなた)) を用いている点である。

(21) “Anh nghĩ vừa thương, lại vừa **giận mình**.
私 思う ながら 見守りたい また ながら *giận* あなた
(あなたを見守りたいと思う同時に、*giận* するよ。)
その言葉を言ってしまったことを後悔し、ナムはビン（妻）の手を握りしめる。
- **Giận mình** thì ít, thương **mình** thì nhiều.”
giận あなた は 少ない 見守りたい あなた は 多い
(でも、見守りたい感情のほうが *giận* より多いよ。)

(Bí Võ, Nguyễn Hồng 1936)

giận と近接して起きる語句を表 9 に示す。

「親密関係」に関わる語句	<ul style="list-style-type: none"> 親密な相手への呼びかけ語 <i>thuong</i> (相手を見守りたい感情) <i>giận nhau</i> (<i>giận</i>+互い) (恋人同士が喧嘩した後の冷戦状態) <i>ghen</i> あるいは「恋愛による嫉妬感」を喚起する表現 <i>làm lành</i> (仲直りする) <i>buồn</i> (悲しみ)
「後続反応」に関わる語句	<ul style="list-style-type: none"> 内向的な態度：無口になる、相手と距離を取る、一人で考え込む、受け入れられるなど 外向的な態度：拗ねる、相手をかわいがる、相手を注意するなど

表 9 : *giận* と近接して起きる語句

ベトナム語の *giận* は、「親密な関係にあるという観点から、その親密な相手の行為に対する不快感」を表す。この感情には、相手に対する復讐意欲は含まれない。その代わりに、相手を大切に思い、期待しているからこそ、失望したり、落ち込んだりすることを意味する。また、この感情に後続する反応は、攻撃的な含意ではなく、相手が親密な人であると思いながら、内向的な態度を取るか、あるいは、相手の間違ったことを知つてもらうために行動することが含まれる。

ここまで見たように、アメリカ英語の *angry* とベトナム語の *giận* は「ある事に対する不快感」という点では共通しているものの、その判断の基準や感情に統いて起こる反応がそれぞれ異なる（表 10）。

	アメリカ英語の <i>angry</i>	ベトナム語の <i>giận</i>
感情の対象	限定がない	親密な人
感情を起こす原因の判断	個人の観点から「自分の自尊心や個人的利益が侵害された」と判断する	親密関係の参加者の観点から「相手が親密な人としてすべきでないことをした」と判断する
感情主体の態度	復讐意欲の含意がある 攻撃的な態度が多い	内向的な態度が多い
文脈・談話を表す表現	コーパスの用例では、 <i>angry</i> の例文中あるいは、その近接文脈に「利用されたり、個人の利益が侵害されたり、侮辱されたりした」ことを表す（あるいは含意する）表現が多く観察された（76 件）。	コーパスの用例では、 <i>giận</i> の例文中あるいは、その近接文脈に「相手との親密な関係」を表す（あるいは含意する）表現が多く観察された（80 件）。

表 10 : アメリカ英語の *angry* とベトナム語の *giận* における使用特徴の相違点

6. アメリカ英語の ANGER とベトナム語の GIẬN のフレーム構築を目指して

Kövecses らは、メタファー的慣用表現をもとに、感情を引き起こす典型的な状況やそれによって起こる身体の生理的変化は「典型的理解モデル」の形（表 1）で構造化されると主張している。しかし、これまでの分析から分かるように、人間は身体基盤のレベルで共通しているとしても、感情の判断やその反応は文化によって異なる可能性がある。アメリカ英語の ANGER とベトナム語の GIẬN は「ある出来事に対する不快感」という点では共通しているものの、その判断の基準や、感情に統いて起こる反応がそれぞれ異なる。したがって、通言語的な感情表現に関する認知言語学的分析をより強固なものにするためには、これまでの「身体の生理的経験基盤」を軸とした説明に加えて、フレーム(Fillmore 1982)の概念を取り入れる必要があると考えられる。以下では、フレーム意味論の考え方と Kövecses (2020)による背景知識の概念を援用し、感情のフレームには、状況的背景(situational context)、身体的背景(bodily context)、談話的背景(discourse context)という 3 つの側面が含まれると提案する。それぞれの側面が感情理解と表現に対して担う役割や関係を表したもののが図 1 である。

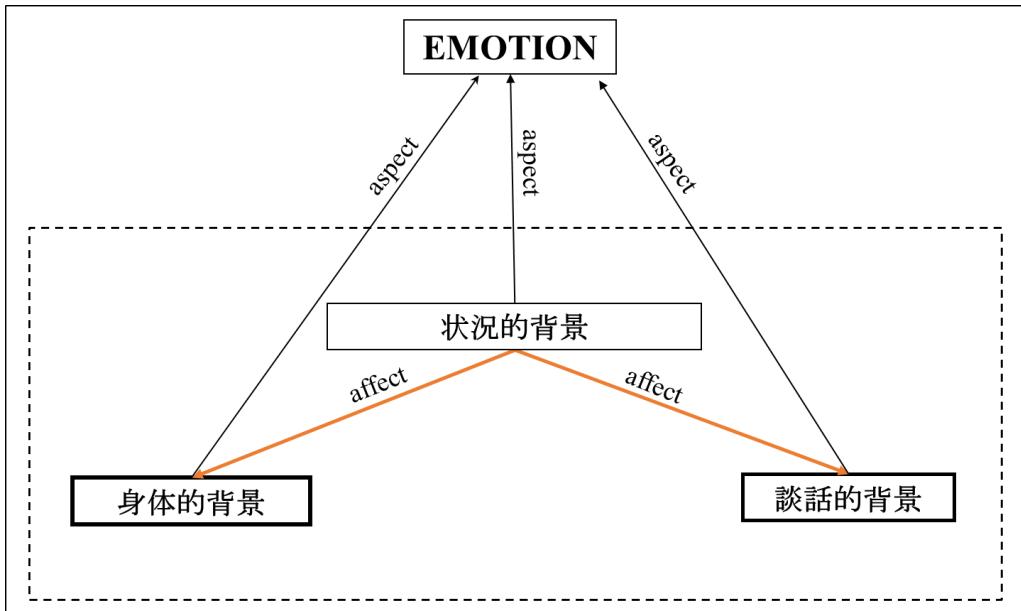


図 1：感情概念のフレームの要素

各背景的知識について説明する。まず、状況的背景とは、感情がどのような文化的背景や社会的状況で生じやすいかを示す。次に、身体的背景は、感情が生じた後の反応に焦点を当てる側面である。最後に、談話的背景は、相手に対して、感情の主体の態度がどのように表現されるかを示す側面である（例えば、どの対象に対して使用されるか、その対象に対する感情はどのように表現されるかなど）。

重要な点として、これら 3 つの背景は対等な影響関係にあるのではなく、状況的背景が他 2 つの側面に影響を与える関係になっている点である。感情は通常、主体が出来事を評価した後に生じる。そして、出来事を評価する際の基準は、文化や社会の価値観によって異なる。そのため、ある主体が自らの文化的・社会的背景（状況的背景）を基に、特定の状況をどのように評価するかによって、感情の表現も異なる意味を持つことがある。オレンジ色の「affect」と書かれた矢印は、このような、状況的背景が身体的背景と談話的背景に与える影響関係を表したものである。

6.1. ANGER のフレームの要素

以上で提案した感情のフレームの側面を基にすれば、アメリカ英語とベトナム語の感情概念を適切に説明することが可能になる。まず、アメリカ英語の ANGER のフレームの要素は、図 2 のようになる。

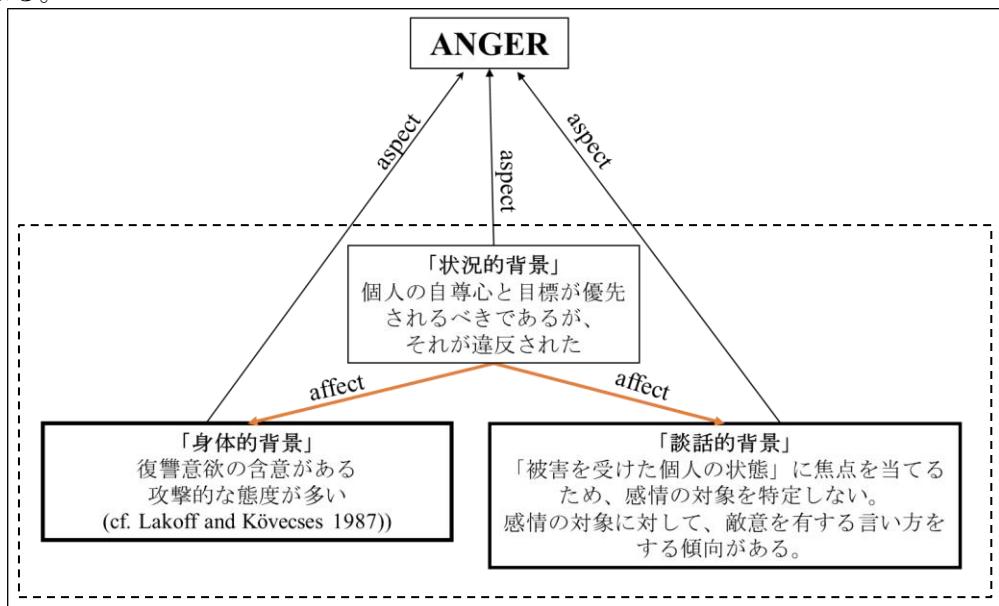


図 2 : ANGER のフレームの要素

これまでのコーパスの例では、ANGERの感情が生じる場合の特徴として、他人が個人の目標や自己評価に影響を及ぼす文脈が多く観察された。そのような特徴は、ANGERの状況的背景である。実際、このような「状況的背景」が ANGER に関する言語表現から喚起されることは、コーパスの用例だけでなく、Doan (2023) の心理的実験の結果でも指摘されている ((7) のように、騙されたこと、あおり運転など)。この ANGER の状況的背景は、ほかの身体的背景と談話的背景に影響を与える。

次に、感情が生じた際、個人は自身の自尊心に合致する反応を示す可能性が高く、これは身体的な反応に表れる。したがって、ANGER の身体的背景では、反応態度として「復讐する」含意が含まれる。

- (7) I was *angry* that someone cut me off in traffic, so I *flipped them off/honked and yelled* at them.
(Doan 2023:99)

続いて、文化心理学の研究で指摘されているように、個人主義の感情である ANGER は、個人の内面に焦点があてられる (Markus and Kitayama 1991, Mesquita 2001, De Leersnyder et al. 2015)。その結果、ANGER のフレームの談話的背景においても、原因の相手を特定せず、もっぱら被害を受けた個人の状態に焦点を当てる傾向がある。このことは、コーパスから得られた *angry* の用例において、感情の対象に一定した傾向が見られなかったことを説明してくれる (5.1. 節の表 5 参照)。なお、Doan (2023) の母語話者による作文の実験でも、*angry* を使った文では、感情の原因となつた人物を表さない構文 (受動態や不定代名詞) が多く用いられた (例えは、例(22))。

- (22) I was *angry* that I was lied to, so I *wanted to fight*. (Doan 2023:99)

6.2. GIĀN のフレームの要素

続いて、ベトナム語の GIĀN についても、そのフレームの要素を見てみよう。GIĀN のフレームにおける状況的背景、身体的背景、談話的背景という 3 つの側面は、図 3 のように整理することができる。それぞれの側面内の要素が、アメリカ英語の ANGER と異なっている点に着目したい。

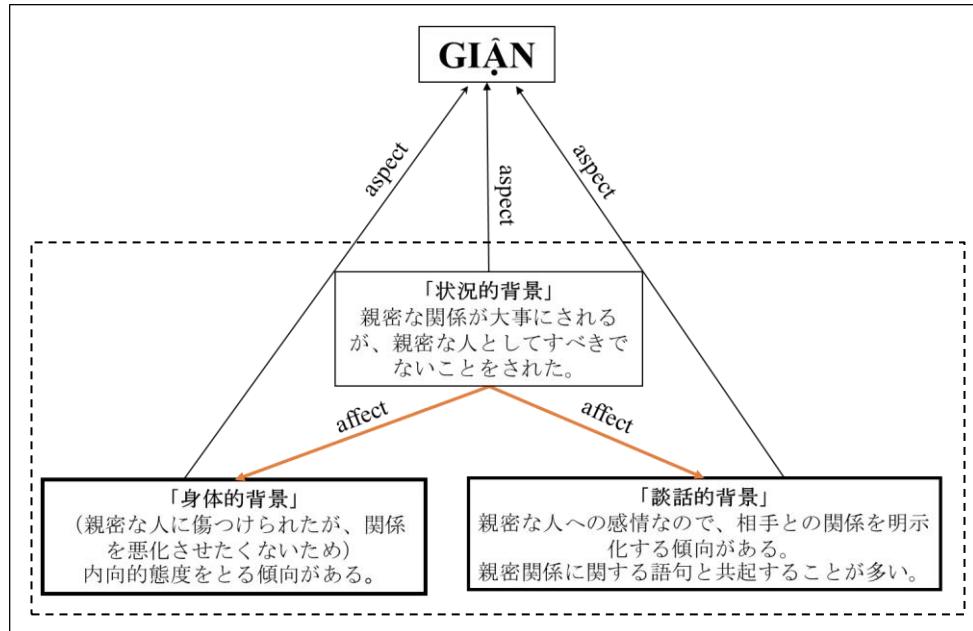


図 3 : GIĀN のフレームの要素

まず、GIĀN が有する状況的背景は、「親密な人としてすべきでないことをされた」というものである。このような場面は、前述したコーパスの用例と Doan (2023) の実験結果にも一致する。Doan (2023) では、ベトナム人に *giān* を用いて作文してもらったところ、すべての被験者が (8) のような「親密な関係」(恋人、親友) を明示して文を作ったことが指摘されている。また「親密な人がすべきではないこと」への反応としては、「復讐」ではなく「内向的な態度」(距離をとる、

無口になる)が多く見られた(Doan 2023:99)。さらに、GIÂNの談話的背景としては、相手との関係に焦点を当てる傾向がある。コーパスの用例においても、Doan (2023) の実験結果においても、giân を用いた場合の感情の対象が主に「親密な人」であったことを想起されたい。

- (8) Tôi **giận** vì **người đó** đã không làm được những gì **họ** hứa,
私 giận から あの人（彼氏）しなかった 得る 複数 何 彼 約束する
nên tôi đã bồi về mặc cho **họ** xin lỗi rất nhiều.
だから 私 帰った にもかかわらず 彼 謝る たくさん
(あの人人が約束を果たさなかつたことに私は *giận* して、彼が謝つたにもかかわらず私は帰つた。)
(Doan 2023 :100)

今まで見てきたように、アメリカ英語の ANGER が個人の内面に注目する感情であるのに対して、ベトナム語の GIÂN は「相手との親密な関係」が先に活性化される。アメリカ英語の ANGER とベトナム語の GIÂN に関する典型的な違いが見られる例として、以下の(7)と(23)を比べてみよう。アメリカ英語では、(7)のように、よく知らない人に対しても ANGER の感情を抱きうる。これに対して、ベトナム語の(23)の文は違和感を感じさせる。これは、GIÂN という感情が通常は親密な人々に対する感情であり、より親密な文脈で生じるものだからである。言い換えれば、(23)であっても、感情の主体（私）と「あおり運転をした人」が何らかの親密な関係（例えば、親友など）を有していれば、(23) は問題なく容認される。

- (7) I was **angry** that *someone cut me off in traffic, so I honked and yelled at them.* (Doan 2023:99)

- (23) (??) Tôi **giận** vì có **người** cắt ngang khi tham gia giao thông nên
私 giận から ある 人 あおり運転 時 運転する だから
tôi đã bám còi và mắng họ.
私 した クラクションを鳴らす そして 叫ぶ 彼ら
(??私は誰かにあおり運転されたことに *giận* して、クラクションを鳴らして叫んだ)

6. まとめ

本稿では、コーパス調査を通して、アメリカ英語の *angry* とベトナム語の *giận* における使用上の相違点を明らかにした。感情は、個人の内面とともに文化的背景との相互作用から影響を受けるため、ANGER や GIÂN といった個別言語の感情語を理解するには、その背景（フレーム）となる文化的価値観を考慮しなければならない。また、感情表現は文脈に依存し、前後の文や発話と深く関連しているため、感情表現の分析を行う際には、談話全体の連續性を検討することも重要である。この点を鑑みて、本稿では、Kövecses (2020)を基に、感情語のモデルの中に「状況的背景」、「身体的背景」、「談話的背景」という 3 つの要素を含める必要があることを提案した。

参考文献

- Doan, Ngoc Minh Tran (2023). 「フレーム意味論と直接スコープから見たベトナム語、日本語および英語の感情概念：ベトナム語の *giận*、日本語の「怒り」、英語の *anger* を比較して」『言語文化共同研究プロジェクト 2022/レトリックと文法』、大阪大学人文学研究科. 91- 104.
- De Leersnyder, Jozefien; Boiger, Michael; Mesquita, Batja (2015). Cultural differences in emotions. *Emerging trends in the social and behavioral sciences: An interdisciplinary, searchable, linkable resource*. Wiley; Hoboken, NY. 1-15.
- Fillmore, Charles J. (1982). Frame Semantics. *Linguistics in the Morning Calm*. Hanshin Publishing Co., Seoul. 111-137.
- Lakoff, G., & Kövecses, Z. (1987). The cognitive model of anger inherent in American English. In D. Holland & N. Quinn (Eds.), *Cultural Models in Language and Thought*. Cambridge University Press. 195–221.
- Kövecses, Z. (2020) *Emotion Concepts in a New Light*. Rivista Italiana Di Filosofia Del Linguaggio.42-54.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991) "Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation". *Psychological Review*,98(2), 224–253.
- Mesquita, B. (2001) Emotions in collectivist and individualist contexts. *Journal of Personality and Social Psychology*,80 (1), 68–74.

コーパス

- Davies, Mark. (2008-) *The Corpus of Contemporary American English (COCA)*. Available online at <https://www.English-corpora.org/coca/>.
- Vietnam Lexicography Centre (1998-) *Vietnamese Corpus of VIETLEX (VIETLEX)*. Available online at <http://www.vietlex.com/kho-ngu-lieu>.